

適正施設ガイドライン

【ヨウスコウワニ *Alligator sinensis*】

2020年9月

公益社団法人日本動物園水族館協会

種の概況

全長は最大でも 2m 程度。口吻は短く、頸部背面を覆う鱗（頸鱗板）は 4 枚。背面の体色は黒っぽく、淡黄色の縞模様が入る。腹面の体色は淡褐色。幼体は体色が黄色で黒い縞模様が入るが、成長に伴い色彩は黒ずむ。

流れの緩やかな河川や池などに生息する。冬季には複雑な形状の横穴を掘り、その中で冬眠する。

食性は動物食で、主に貝類を食べるとされるが、甲殻類、魚類、鳥類なども食べる。繁殖形態は卵生。5 月～6 月に発情、交尾のピークを迎え、その後 7 月頃に塚状の巣を作り、そこに 10～40 個ほどの卵を産む。

1 飼育環境

1-1 飼育施設

陸地部分とプール部分が必要。最大でも全長 2m 程度であるため、単体を飼育するだけならそれぞれ 2.5×2.5m 程度の面積でよいが、繁殖を視野に飼育する必要があるため、少なくともそれ以上が必要となる。1 ペアで繁殖を視野に飼育するなら、陸地もプールも少なくとも 3×3m 程度あった方がよい。

陸地部分は、産卵床として一部でも土を設置する。産卵時は穴を掘って卵を産み落とすため、少なくとも土は 50 cm 程度の深さが必要。これは産卵期だけ土入れして塚のようにしておいてもよい。冬眠させるなら、シェルターなども必要。これは 1 頭につき幅 50 cm、奥行 150 cm、高さ 50 cm 程度あればよい。

プール部分は最大水深 50 cm 程度が必要。深すぎても交尾しにくい可能性があるため、1m 程度までとしておく方がよいかもしれない。浅場と深場があるとよりよい。

また、相性がよくないペアや、非繁殖期は別居させる等のために、隔離スペースも必要となる。展示場を仕切れる構造にしてもよいし、隣接した部屋を設けてもよい。発情の指標としても考えられる鳴き合いを確認するためにも、完全に音も気配も隔絶できてしまう構造にはしない方がよい。こちらも陸とプールからなる構造で、面積は展示場と同程度の最低条件は必要。

なお、陸もプールも、個体が追い込まれてしまう構造（狭く入り組んだ構造）は避ける。

1-2 光

四季のある温帯に生息するため、日本の外光をそのまま取り込んでおけばよい。人工的に光の周期をコントロールする場合は、夏パターンと冬パターン、移行期のパターンを用意する。冬眠させる場合は、この限りではない。紫外線要求量はそれほど高くないように考えられるが、日光がまったく入らない環境であれば紫外線ランプが必要。

1-3 温度

屋外で飼育する場合は特に加温等の必要はないが、夏場に高温になり過ぎる（34℃程度を超える）ようなら、対策が必要。日陰を作り涼しい部分を設ける程度でも可。冬場は連日氷点下の気温が続くような地域では、一部温度が保てる（7、8℃程度）シェルターがあった方がよい。これは産卵場所としても利用できるかもしれない。水温も同様で、外気にまかせて問題ない。

屋内で冬眠させずに通年飼育する場合は、気温、水温ともに 25℃前後をキープする。通年同じ温度でも、外光が取り込まれる構造であれば、冬場はほとんど採餌しないと思われる。

1-4 水質

特別な設備等は必要なく、通常水棲動物が暮らせる水質ならば特に問題はない。必要に応じて水の入れ替え等を実施し、適度な水質を保つようにする。

1-5 床材

基本的には土やウッドチップ等がなく、コンクリートなどの状態でも問題ない。しかし、産

卵期には産卵床として腐葉土等を塚状に盛り上げる、あるいはシェルター内いっばいに詰めるといった方式で用いる。野生では堆肥の発酵熱で孵卵するとも言われているため、自然孵卵する場合は、多少温度を高く保つ工夫が必要。

1-6 エサ

通常は淡水魚（コイ等）、鶏肉等、繁殖期前にカロリーの高いエサとしてヒヨコ、ラット等を与える。頻度はおおむね週に1回程度だが、冬期は減り（もしくは給餌しない）、繁殖期から産卵期（春先から夏ごろ）、冬眠準備期は増える（回数ではなく1回あたりの量を増やしてもよい）

1-7 繁殖について

中国の繁殖センターや動物園等での繁殖実績は、いずれも冬眠を経験させている。おそらく四季のリズムに合わせるのが、繁殖に至るより確実な方法だと思われる。他のワニと同様、オス、メスの相性も重要と考えられることから、繁殖にはその辺りも見極めながら進めていく必要があるだろう。通年同居、繁殖期だけ同居、どちらが好ましいかは不明。冬眠前にはある程度栄養を蓄えさせ、冬眠中の消耗に備える。冬眠が明けたら、繁殖に向けてエサ量を増やす。

国内においては、屋内で通年同条件での飼育にも関わらず、エサの強弱等によって繁殖に至った例がある。これは、気温や水温に変化はない状態で、春先（繁殖期に向けて）と秋（冬眠に向けて）にエサの量や頻度を増し、エサの種類も変えることでカロリーも高くすることで体内リズムを作り、繁殖に向けたスイッチを入れるというものである。

発情期には鳴き交わしの頻度や反応も増すため、これらの誘発として人為的にガラス面を叩いて音を出すといったことも有効であると思われる。

交尾は基本的に水中で行われるため、この時期はできるだけ個体が水中にいるように操作するのも効果があるかもしれない。

上述のとおり産卵床（塚）が準備できていれば、交尾後1ヶ月程度で産卵する。産卵後の卵を取り上げて人工孵卵する場合には、30～31℃、湿度80%程度に設定する。孵卵期間は60～70日程度。